

蝌蚪に足

松岡隆子

囀の膨らみやまぬ水辺の樹
鳥つるむ野火止塚の日のまろき
接骨木の芽吹き
の枝の奔放に
ささめきのひろがつてゆくすみれ草
すみれ野を歩みて
齡忘じをり
陽炎の真つただ中といふところ
ぽつねんと沓脱石や飛花落花

思はざる落花の嵩に躓けり
クレーンの掬ひこぼせる春の土
少年に大き父の背蝌蚪の水
考への纏まらぬまま蝌蚪に足
夜更かしの何するでなき朧かな

三月三日、朝日カルチャー教室の吟行で鎌倉の寿福寺を訪ねた。山内の裏墓地へと径を辿り虚子の墓へと近づくと墓前に人影が見えた。星野椿先生と高士先生だった。お邪魔をしては申し訳ないがご挨拶だけでもと思ってお声をかけた。私たちは後でゆつくり拜ませて頂くつもりだったが、お線香まで分けてくださり虚子の墓も立子の墓も拜ませて頂き、思いもかけない至福のひと時を授かった。その後「玉藻」の巻頭エッセイの中で高士先生がこの日の事を書かれていると知り感激した。これも眸先生からのご縁と感謝するばかりである。